

都市遺産を考える

— 次代に引き継ぐ物語 —

池田 誠一

【2】古代の名古屋…①熱田の宮
②東山古窯群

1 名古屋の古代

古代から時代を追って、名古屋の都市遺産を探してみたいと思います。

まず、古代、すなわち先史の昔から平安時代くらいまでの間で、名古屋が誇りうるものには、どんな歴史や物語があるでしょうか。

最初に思いつくのは、神話の世界になりますが、日本武尊(ヤマトタケル)と宮簀姫の物語です。そして三種の神器の一つ、「草薙剣」



図1 「草薙剣」は日本武尊から宮簀姫に渡された
(尾張名所図会)

が名古屋の熱田神宮に祀られたことでしょう(図1)。その背後には尾張氏が存在があり、東海一という断夫山古墳も造られています。でも、なぜその神話の地が名古屋になったのかは、あまり説明されていません。そこに、「熱田の宮」のカギになる物語がありそうです。

次に頭に浮かぶのは、この地域の「焼き物」のことです。名古屋は5世紀ごろから須恵器が焼かれ、それが全国的にも有名な瀬戸や常滑の焼き物のルーツになったとされています。なぜそのようになったのか。ここにも物語がありそうです。

この他にも、市内には朝日遺跡とか志段味の史跡群など、物語のありそうな古い史跡があります。しかし、残念ながら、その後の影響がよくわかってはいません。また、古代の東海道や、国分寺となった元興寺などの史跡もありますが、全国の人に語れる物語にするには少し物足りないように思えます。

むしろ意外性からは、名古屋の真ん中を「木曽川」が流れていたという話は面白かもしれませんが。また可能性の話ですが、邪馬台国の

対立国、「狗奴国」の濃尾平野説という議論も、全国的には興味を持たれる話ではないでしょうか。今回は、このような視点から、名古屋古代のいくつかの物語を考えてみたいと思います。

2 古代の物語

(1)「熱田の宮」…三種の神器はなぜ？

三種の神器といえば、皇位継承のしるしとして、昔は大きな注目を集めたものでした。昭和天皇でさえ、太平洋戦争の本土決戦を前に、伊勢・尾張の神器の護持ができなくなることを心配されたといえます。そのような大事な神器の一つが、なぜ名古屋にあるのでしょうか。

古事記や日本書紀(以降、記紀)では、その剣はヤマトタケルが東国征服の帰路、この地に残していったことになっています。しかしタケルは実在の人物かどうかも明確ではなく、信用されないかもしれません。ところが剣は、現実にこの地に祀られているのです。今日では、記紀の表現の裏には何か事実が隠されているということが云われます。それを探し出すことが物語のカギになりそうです。

歴史書を紐解くと、そこに尾張氏という豪族の存在が浮かび上がります。その出自は、従来は奈良葛城の高尾張説がありましたが、今日では、当地方説が有力になっています。その尾張氏は「連(むらじ)」という身分でした。これは大伴氏や物部氏と並ぶ神祖の身分になります。そして尾張氏は、4世紀末から5世紀初にはヤマト政権の中で重要な役割を担っていたという記録もあります(図2)。その後にも、6世紀の継体天皇の頃や7世紀の天武天皇の頃には、尾張氏の政権との関連も記録されているのです。なぞは深まります。

年 代	記 述
4 世紀後半	年魚市県などの県、設置
～5 世紀初頭	尾張氏、大和朝廷の内廷と関係
5 世紀末頃	尾張氏、尾張国造の地位を固める
507 年	尾張連草香の娘目子媛、継体天皇の后となる
この頃	熱田社創建
536 年	尾張連、尾張国の屯倉の穀を筑紫に運搬

図2 新修名古屋市史「年表」に記載の名古屋初期の出来事(史跡関係を除く)。文献①

そして考えられることは、このような尾張氏が存在が、記紀の表現にも影響を与えていることでしょう。尾張氏は、早々と東国征服に欠かせない勢力に成長していたといえるかもしれません。だからこそ、三種の神器の一つを所持するような立場になったのでしょうか。いずれにしても、熱田の宮は名古屋第1級の都市遺産であることは確かでしょう。

(2)東山古窯群…瀬戸・常滑のルーツ

常滑焼、瀬戸焼は日本六古窯です。加えて瀬戸焼は、「セトモノ」の名を全国に通用させるほどに普及しました。ところがこれら、日本を代表するような焼き物のルーツが名古屋にあるとされるのです。

戦後のことです。千種区の城山中学の先生が生徒とともに末盛付近で古い須恵器とその窯跡をいくつか発見しました。それらの収集・分析から5世紀中頃から生産が行われていたことが分かりました。その後、東部丘陵一帯でも発見され、次第に窯は東に広がっていることが分かってきました。

焼き物を作るには、良質多量の陶土と共に燃料の薪が必要です。窯場はそれらを求めて丘陵地を東に進んでいったのです。そして中世には猿投山の西南麓へと広がりました(図3)。そこからは、北に進む流れは陶土に恵まれた瀬戸に入りました。一方南に進んだ流れは、常滑に到達したようです。そしてそこを拠点に、それぞれの地に合った焼物が発達していったと考えられています(文献③)。

ルーツの「東山古窯群」は、その後生産されなくなって消えていきましたが、昭和47年に発掘された鎌倉初期とされる東山植物園内の登り窯が保存され、その盛期の一端を思い起こさせてくれます。

5世紀から焼き物を焼いた人たちは外来の朝鮮の伽耶国の人だったようで、付近には「唐山」という地名も残ります。末盛のスエも、元は「陶(すえ)」からきたのでしょうか。

(3) その他の物語

<古木曾川>

あまり知られていませんが、木曾川は1、2万年前には名古屋の中央部を南北に流れていたといいます。名古屋大学におられた足立守教授が突き止められました(文献④)。

その流れは、大曽根から南に熱田の東側を通り、幅は1～1.5キロで、地形的には「大曽根凹地」と呼ばれます(図4)。従来は、古矢田川とも想定されていましたが、足立教授は、岩石の分析から「古木曾川」であることを突き止められました。

矢田川と木曾川では規模や水量が違います。今日、その東岸には吹上や井戸田の地名が残り、西岸では熱田神宮の湧水があります。江戸時代、台地上の名古屋城や城下の井戸水がよく出たのも、この古い木曾川の伏流水なのでしょう。これも名古屋という都市の自然遺産の物語といえるかもしれません。

<狗奴国論>

邪馬台国の位置を巡っては、いまだ北九州説と畿内説がしのぎを削ります。文献史学的には北九州説、考古学的には畿内説が先を行くとされています。

ここで名古屋として注目したいのは、その対立国だったとされる「狗奴国」です。中国の魏志には「南」とあるため、熊本や熊野が候補

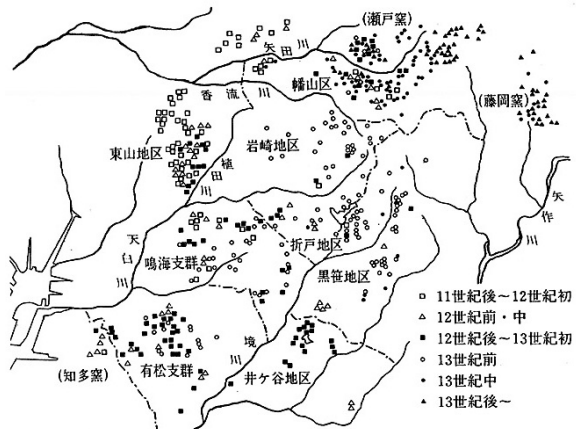


図3 中世猿投窯の古窯跡。

時代と共に中央の猿投山から南と北に動いている。文献③

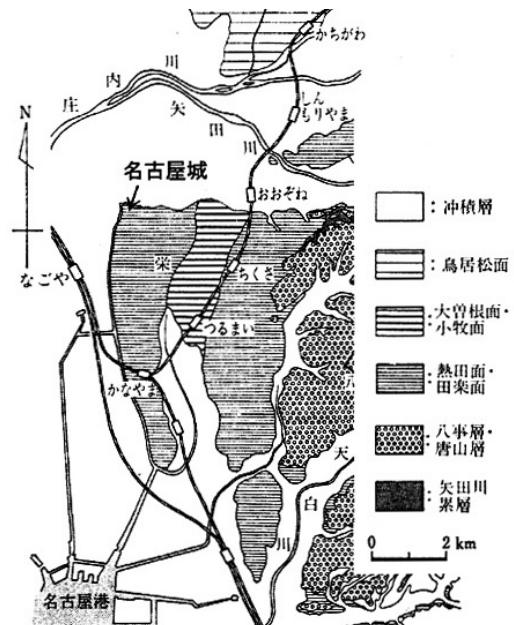


図4 名古屋台地を侵食した「大曽根凹地」
(古木曾川：中央の太横線のゾーン)

地とされます。しかしその後にかかれた後漢書では「東」とあるようで、畿内説の場合、方向や記述から、さらには考古学的にも、濃尾平野の可能性が出てきたのです(例：図5)。

とすると、注目したいのは、前述の「尾張氏」のことです。仮に、邪馬台国が大和政権に変わっていったのだとすれば、狗奴国の主体が尾張氏に変わっていったという可能性は



図5 邪馬台国畿内説に見る「狗奴国」濃尾平野説(矢野寿一：HP)

ないでしょうか。そうなら、共同で東征したり、三種の神器を分け合うことになったことも理解できるのです。このような口マンのある話も、名古屋の遺産の中に加えると面白さが出てくるのかもしれません。

3 紀行 熱田の宮

… 本物の「剣」はどこに？ …

それでは、一番目の物語とした「熱田の宮」を歩いてみます。なにか、現存する遺産が見つかるのでしょうか。

<熱田神宮>

地下鉄の伝馬町駅の1番出口を出て、バックして国道を西方向に進みます。少し行くと、右奥に鳥居の見える通りに出ます。この通り



剣を祀る八剣宮。

8世紀の剣の他にもたくさんの剣が奉納された

が昔は熱田社から海に向かう、中心の参道でした。右に曲がり、境内の鳥居をくぐらず左手に入ります。この奥には別宮の八剣宮があります。708年、朝廷からの剣が祀られているといいますが、その背後には何か意味がありそうです。

バックして、こんどは鳥居の東側の道を選びます。こちらが明治の遷宮以前の参道で

す。進むと、ぼつぼつと摂社があります。途中で水路を渡る所から左手を覗くと二十五丁橋が見えます。西行が腰を掛けたという伝説のある古い石橋が、参道から移されて保存してあります。旧の参道を進むと、左手に古い門があります。「清雪門」といい、昔の北門でしたが、草薙の剣の盗難経路だったとかで閉鎖され、中世にここに移されたものです。東からの参道に出あって左に、すぐ本参道を曲がります。そのまま鳥居を潜り、まっすぐに進んで本殿にお参りします。



旧参道と清雪門。

門の塀は重厚な信長塀になっている

本殿からはバックして左に、信長が桶狭間の戦勝の礼に造ったという重厚な信長塀を見ます。そして再びバックして本殿の東側の小道に入ります。少し先左手にある土用殿は、なぜか、明治時代まで草薙の剣が祀られていたといえます。少し戻って、また東側の道を



熱田神宮本殿の遠望。
明治時代に神明式になった

奥に向かいます。右手には古くからの手つかずの杜が残り、巨木が並びます。その先には清水社があり今も水が出て、古木曽川の伏流水を思わせます。

その先は、最近解放された小道があり、森の中をずっと本殿の裏を通して一周できるようになりました。周ると本殿前に出ます。参道をバックし、右に曲がって西門を出ます。



土用殿。
なぜか、明治維新まで草薙剣はここに祀られていた
＜断夫山古墳へ＞

西門を出て、すぐ右の歩道橋を渡り、国道を北に進みます。少し行くと、門だけがポツンと残されたように見える誓願寺があります。この付近は、昔は大宮司の居宅で、大宮司の娘の子だった源頼朝の生誕地とされています。

次の信号を渡って左に、1本目の角を斜めに進むと学校に突き当たります。右に曲がる



源頼朝の出生地とされる誓願寺。
寺内に産湯の井戸もある

と法持寺です。その奥に森のように見えるのは古墳で、日本武尊の墓とされる白鳥古墳です。寺は、空海が武尊を敬って祠を建てたとされます。古墳に近づくため、学校に沿って左に曲がり、堀川に出て右に。すぐ右の古墳の公園に入って階段を上ると、前方後円墳の前に出ます。静かな御陵の前という雰囲気があります。



白鳥古墳。日本武尊が亡くなった後、飛び立った
白鳥の一羽が舞い降りた所とされる

公園を北に出て、すぐ右の道を北に進み、あとは東北方向にジグザグに進むと、断夫山古墳のある公園になります。公園内の遊歩道を古墳に沿って北に進むと、案内板があります。この古墳は、前方後円墳で、全長150mと東海地方一です。築造は6世紀初とされ、尾張氏の首長の墓と考えられています。

古墳に沿って右に曲がり、国道に出ます。



国道の横にある、全長150^{メートル}、東海一という
断夫山古墳



熱田の地主神とされる「高座結御子神社」

すぐ左の歩道橋を渡り、前の左斜めに進む道に入ります。この道は、北に続く古道で、中世の幹線道路跡が発掘されています。少し進むと道路の向こうにお社が見えます。高座結御子神社で、この熱田の地主神とされます。熱田社は5、6世紀にこの地に移ってきた社といわれ、ここはその氏神だったのでしょうか。さらに、この付近から北のゾーンには、弥生時代の遺跡や5、6世紀の古墳群、6、7世紀の墓地群等が発掘されており、長い熱田の歴史を感じます。落ち着いた神域にお参りし、その西門を出ると少し先が国道で、右側に地下鉄西高蔵駅の出入口があります。

4 短い「物語」

都市遺産は、幅広く、しかも子々孫々に伝えていくものです。そこにはどんな伝達手段

がよいのでしょうか。あまり大量なものでは伝えることができません。お話で語れるくらいでしょうか。文章ならば短い物語で。紙芝居や絵本で表せるくらいの分量のものでしょう。文化庁の定める日本遺産の「ストーリー」がよい見本になりそうです(図6)。

海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群

～ 御食国^{みつき}若狭と鯖街道 ～

<ストーリー>

若狭は、古代から「御食国」として塩や海産物など豊富な食材を都に運び、都の食文化を支えてきた地である。また、大陸からつながる海の道と都へとつながる陸の道が結節する最大の拠点となった地であり、古代から続く往来の歴史の中で、街道沿いには港、城下町、宿場町が栄え、また往来によりもたらされた祭礼、芸能、仏教文化が街道沿いから農漁村にまで広く伝播し、独自の発展を遂げた。近年「鯖街道」と呼ばれるこの街道群沿いには、往時の賑わいを伝える町並みとともに、豊かな自然や、受け継がれてきた食や祭礼など様々な文化が今も息づいている。

図6 日本遺産で作られる「ストーリー」(若狭の例)

では、その短い物語には、何を求めるべきでしょうか。第1は「水準」です。全国の人に誇るところのある物語でなければなりません。第2は「事実」です。その道の有識者にも理解が得られるような物語の必要があります。そして第3は「面白さ」です。幅広い人の関心と呼ぶことが出来なければなりません。

もちろんこのような物語は、そうたくさんはありません。しかし、何でもないようなことも、角度を変えてみると、従来とは違った評価ができるかも知れません。そんな話を探して名古屋を旅してみたいと思います。

<主な参考文献>

- ①同編集委員会『新修名古屋市史10・年表』(2001、名古屋市)
- ②松田宏二『草薙剣は二本あった』(1991、^{（株）}鹿友館)
- ③永原慶二『常滑焼と中世社会』(1995、小学館)
- ④足立守「名古屋の地質と地形から見た濃尾平野の生い立ち」(2002、ARCHITECT2002-11)